

この物語の主人公は、目の見えない少年です。小さいころに光を失った少年ルーチョは自分の目のことで同情や親切にされるのがとてもきらいです。ぼくは最初そんなルーチョの気持ち分かりませんでした。

ぼくはふだんから、人にたよってしまう所があります。お母さんによく、

「自分で、やりなさい。」

と、言われます。でも、少年野球を始めてから、身の回りの準備を自分でできるようになり、前より人にたよらなくなったと思います。

ぼくはなぜルーチョが人にたよるのがきらいなのか考えてみました。ぼくがもし目が見えなかったら、人になかなかたよれないと思いました。それは「バカにされて笑われるのではないか」とか「こんなことも出来ないの」とかを言われてしまふんじゃないかと不安になってしまふと思っただからです。

ぼくも野球を始めたころは、はずかしくて、何も言えませんでした。だけど、分からないことや教えてほしいことを勇氣を出してかんとくや仲間聞いてみたら、やさしく教えてくれました。それから分からないことはどんどん聞くように心がけると、野球も上達して楽しくなってきました。ルーチョも最初は、がんに自分の力だけで生活していこうとしたけれど、キアラの「だれだって、人に頼って生きている。出

来ない事は誰にでもある。」という言葉聞いて、自分のがんこさが周りにめいわくをかけていることに気がつき、やっと助けを受け入れられるようになりました。心を開くことが出来たルーチョはとても心が軽くなったと思います。

ぼくはこの物語を読む前まで、自分の力ががんばる強さが一番大切だと思っていました。だけど、誰かの力を借りていっしょにがんばることは、それ以上に大切なことだと思いました。誰かにたよることは、はずかしいことではなく、自分が成長出来るきっかけになります。人には目に見えないなやみと目に見えないなやみがあります。目に見えないなやみは、なかなか人に分かってもらえなかったり気がついてもらえなかったりするけれど、おたがいちよとした勇氣や思いやりで心が軽くなったり解決することにつながったりすると思います。これからの人生でいろいろななやみももっとたくさんあると思うけど、ぼくは友達や家族に相談したり、時には他の人のなやみを聞いたり、なやんでいることに気がついたりするようにしたいです。

自分で、出来ることは自分でするということは、とても大切だと思います。だけど、それよりも誰かの力を借りるということは、もっと大切でおたがいがいい気持ちになれます。ぼくもそういう五年生を目標にしたいです。

書名 飛ぶための百歩

著者 ジュゼッペ・フェスタ 作 杉本あり 訳

出版社 岩崎書店